



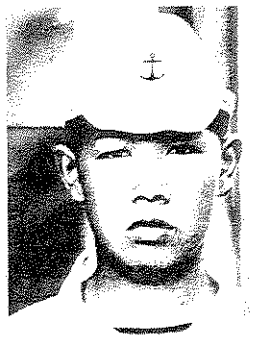
## 出征の19歳、南洋で戦死

# 軍帽は語る 兄の無念を

## 66年ぶり遺族に届く「望郷」おもんばかる

1944（昭和19）年3月、南太平洋のアドミラルティ諸島で戦死した海軍工作兵長白石保さん（当時19歳）が使用していたとみられる軍帽がこのほど、西条市北条の弟・道正さん（79）の元に届けられた。戦災で遺品がほとんど残らなかった保さん。道正さんは兄がこの世に生きた貴重な証しとして、大切に保管している。

### 西条・白石さん



軍帽は約30センチの黒の布製。海軍のいかりの紋章があり、裏には保さんの氏名や、所属した「呉軍需部」などの記載があった。厚生労働省によると、米第1海兵隊員が南方戦場で入手し、隊員の知人の米国人男性が保管。男性が返還を申し出たことから同省が遺族調査を行い、県を通じて道正さんに届

けた。遺族や地元で戦死者名簿などによると、白石さん一家は第2次大戦当時、広島県呉市に在住。保さんは呉市の海軍軍需工場に勤務していたときに召集され、同諸島マヌス島に派遣された。ニューギニアやラバウルの北方にあり、日本から約4200キロ離れた島。当時、保さんを含む約3800人の陸海軍部隊が守っていたが、同年2月に米軍4万5千人が上陸。約3カ月の戦闘で守備隊はほぼ全滅し、保さんも3月29日に戦死したとされる。

道正さんによると、保さんの出征後、呉市の家が空襲に遭い、保さんの遺品は1枚の遺影を残して焼失していた。本籍地の西条市に帰った家族に、保さんの戦死が伝えられたのは戦後。遺骨や遺髪もなく、家族が質素に葬儀を行ったという。道正さんは「兄は6人兄弟の長男として体調を崩しがちだった父を支え、若いうちから働いてくれた。自分の小遣いで弟や妹に物を買ってくれたり旅行に連れて行ってくれるなど、優しい人だった」と振り返る。戦後長く、兄の詳しい戦死場所も知らされなかった道正さん。一生きていれば子や孫もいたはず。故郷から遠く離れた島を守って死んだ兄は、どんなに帰りたいか。兄の無念を乗せて帰ってきたのだろうか」とおもんばかった。

①白石道正さんの元に届けられた兄・保さんの物とみられる軍帽  
②28日、西条市北条  
③白石保さんの唯一の遺品だった遺影

（今西晋）